



きずな

2011年
(平成23年)

12

ともに
ささえあうために

特集テーマ

障害のある人



- 2 こころの病を描いた絵本を制作
NPO法人すまみらい(神戸市須磨区)
- 3 障害のある人の自立に向けて
谷口泰司さん(関西福祉大学社会福祉学部准教授)
- 4 発達障害者の就労の可能性を探る
NPO法人ピュアコスモ(神戸市中央区)
- 5 知的障害の若者に学びの機会を提供
福祉事業型「専攻科」エコールKOBÉ(神戸市長田区)
- 6 まちのKIZUNAレポート
メインストリーム協会(西宮市)
- 7 12月1日は「世界エイズデー」です
特定非営利活動法人 HIVと人権・情報センター関西支部
- 8 情報ぷらざ

12月4日~10日 人権週間

1948(昭和23)年12月10日の国際連合第3回総会で世界人権宣言が採択されたことを記念し、翌年、法務省と全国人権擁護委員連合会が12月10日を最終日とする1週間を制定。人権尊重思想の普及高揚のための啓発活動を全国的に展開しています。



障害のある人

とともに

ささえあうために

障害のある人を含むすべての人々が、地域の一員として共に支え合う「共生社会」づくりの意識が高まっています。しかし、障害についての理解不足などが原因となつて、障害のある人への偏見や差別意識もまだまだあります。すべての人が「共生社会」の担い手として、誰もが自分らしく暮らすために何ができるかを考えてみましょう。

こころの病を描いた絵本を制作

— 偏見や誤解をなくすきっかけに —

近ごろの話題

NPO法人
すまみらい

(神戸市須磨区)

統合失調症など「こころの病」のある人たちが集う多機能型事業所を運営しているNPO法人「すまみらい」では、今年2月、こころの病を正しく理解し、精神障害に対する偏見や誤解をなくすことを目的に絵本『僕と君の昨日の話』を作りました。

タイトルには「少し過去のことを振り返りつつ、今日生きている自分の存在を見つめ、その証しを求めて前向きに生きていく一人ひとりの思いをみんなに分かってほしい」という願いが込められています。絵は事業所の仲間が描いたもので、その個性的な色使いやタッチに注目のスタッフが掲載を持ち掛けました。

ストーリーは関係者からこころの病で苦しんだ体験談を募り、それをベースにして構成しました。

制作に関わった河原大樹さんは「こころの病は自分で症状を認め、受け入れるというハードルが高く、しかも周りから理解されない時のショックは大きいです。でも、物語を作る中で、苦し



▲制作スタッフの面々(左端が鏡味さん)

◀独特のタッチの絵が印象的です

●絵本の購入についての問い合わせ
※1冊1,000円(送料込み)
NPO法人すまみらい
TEL 078(736)2966



み悩んでいたのは自分だけじゃないことを知り、気持ちが一変になりました。絵本を通してこころの病の症状や苦しみ、周囲への思いを伝えることで、同じ病のある人を元気づけ、楽にすることができた」と話します。

こころの病は10代で発症することも多く、その症状が周囲に理解されないため、引きこもりがちになるケースもあるそうです。すまみらいでは、市内の中学校や高校、大学、教育関係者らに絵本を配布。教育現場で「いのちの大切さ」などを学ぶための教材として活用してほしいと働き掛けています。

事業所の管理者で精神保健福祉士の鏡味秀彦さんは、「最近、統合失調症などへの理解は深まってきたものの、まだ偏見や心ない言動に遭遇する時があります。絵本がこころの病に対する正しい理解と適切な援助を進めるきっかけになることを願っています」と語ります。

障害のある人の自立に向けて

谷口 泰司さん 関西福祉大学社会福祉学部准教授

障害のある人の自立に向けた制度の変遷

支援費制度、障害者自立支援法から障害者総合福祉法（仮称）へと、障害児（者）福祉制度の混迷が続いています。もとより、混迷のすべてが否定されるのではなく、袋小路に向かう混迷もあれば、新たな時代を生み出すための苦しみの時期の場合もあります。では、昨今の障害児（者）福祉を取り巻く状況はそのいずれでしょうか。

批判を承知であえて申し上げますと、障害の種別や制度の空白を解消し、当事者のニーズに合った支援の整備を謳うなど制度面では上向きになるものの、地域社会面では危機感が強まる、といったところが現時点での私の正直な思いです。



確かに、制度の流れだけを見ると、地域格差はあるものの、21世紀の障害児（者）自立生活支援領域は質量ともに充実の一途を辿ってきました。中でも、障害者総合福祉法は、その理念や目的、範囲などの点から極めて先進的

な思想と建設的な内容に満ちたものと言えるでしょう。

ところが、介護保険制度との関係では、目的や性格が異なる別個の法体系として制度設計されることについても議論されており、介護保険制度を中心とする高齢者領域などとの協働を避けようとする動きが、将来的な発展性・普遍性に結び付くかは疑問です。悲観的な展望を申し上げますと、障害者総合福祉法だけが孤立して存在し、共生社会へと歩みだすどころか、措置制度時代と同様に総合福祉法の対象となった人のみが支援を受け、その枠外の人について歩み寄りのない世界（そこでの福祉水準は飛躍的に向上するでしょう）へ逆行するのではという危惧を抱かざるを得ません。

相互理解のための環境整備に向けて

当事者団体等の運動や要望は、常に厚生労働省や地方自治体の障害福祉担当部局にのみ向けられてきた観があります。今後は、同じだけのエネルギーが一般国民・地域住民に対し「共感」という形で向けられるべきでしょうし、社会運動化し、国民的世論の醸成を図る必要があります。また、行政においても直近の施策だけでなく時間をかけ

て、主体（社会）と対象（障害者）の相互理解のための環境整備を図る必要があります。

その際、私たちが唱えるべきは言い古された言葉ですが、「人権」であり、従来の障害者「福祉」という言葉から脱け出すことではないでしょうか。国連の「障害者権利条約は、国内法の整備や長期的視点で、社会自体が変化していくという可能性を持っています。が、すべての人が「かけがえのない個人」として「基本的人権を尊重されることを謳ったもの」として捉えるべきではないでしょうか。

わが国はこの内容を、「障害者」「高齢者」といった対象者別に考えるのではなく、「暮らしにくさ」としてどうか、何を变えていくべきかを先に議論し、その暮らしにくさに直面した時は、「この支援によって自己実現を図ってください、その時あなたは心身に障害を持つておられたのですね」という発想の転換が望まれます。その意味でも障害の有無を問わず、「個々の幸せ」として超越する鍵が「人権」という用語・意識には秘められています。

※障害者総合福祉法（仮称）…国の障害者制度改革推進会議総合福祉部会の提言の中で、現行の「障害者自立支援法」に代わるものとして、その制定が検討されている。従来の制度の谷間や空白にいた障害のある人たちにも対応できるよう、インクルージョン（共生社会）の実現に向けて、必要な制度の整備など恒久的に支援が行われることを目指している。





いろいろなカタチで 障害者たちの自立を支援



▲「これからも発達障害の人のためにできることを続けていきたい」と語る理事長の久村さん(左)と副理事長の石本さん

発達障害者の 就労の可能性を探る

NPO法人ピュアコスモ(神戸市中央区)

NPO法人「ピュアコスモ」では、発達障害児・者の保護者らが集まって知恵を出し合い、さまざまな活動を通して、わが子たちの成長を支えています。

就労機会の獲得に向けた さまざまな試み

ピュアコスモは主に神戸市青少年会館で多彩な活動をしています。

ボウリングや楽しい催しなど、発達障害児・者がほっとできる場所をつくる「本人活動」や、保護者が日常で困っていることや悩みを学び合う相談会や交流会、専門的知識を踏まえた支援のあり方を学ぶ研修会や理解啓発活動などがあります。2003(平成15)年に発足し、6年後にはNPO法人に発足し、100人の会員が参加しています。

「これまでの取り組みが実り、地域社会での発達障害に対する理解は徐々に深まっています。行政や地域の支援、相談できる機関や窓口も初めの頃に比べれば増えてきました。しかし、就労や自立に向けた段階になると、まだまだ課題が多いのが現実です」と理事長の久村恵美さんは話します。

アスペルガー症候群や高機能自閉症の人は、特定領域に興味・関心を示す「こだわり行動」が見られる一方、コミュニケーションの難しさから人間関係を築くことが困難なケースがあります。現在のところ、彼らの仕事場は作業所が中心ですが、作業所の数は少なく、個々の能



▲本人活動の一つ「自分で作るランチクッキング」でチャーハンに挑戦

力を生かすためには一般企業での就労機会の拡充が欠かせません。専門家や企業の担当者を交えての勉強会では、「就労に向けた訓練の重要性と課題」について共に考えています。

また、独立行政法人福祉医療機構の助成を受け、県立総合リハビリテーションセンターと連携して仕事体験事業を実施しています。この事業は、発達障害者が協力企業での就労体験によって自分の能力を生かすことの大切さを学ぶというもので、協力企業側も必要な支援や準備のあり方が学べると好評のようです。

一人ひとりの可能性を引き出し 自立を促す

発達障害者が自立した生活を送る上で重要な課題となってくるのが、親(家族)が高齢になったときのことで、親の介護と障害のある

子の生活支援が必要になります。支援制度の利用に必要な手続きなども、誰かの手助けがなければできないでしょう。見た目に分かりにくい障害のために支援が受けにくく、多くのつらい経験をしてきた子どもたちは他人に助けを求めることがうまくなりません。そういったことから地域福祉がもっと充実してほしいと思います」と、副理事長の石本律子さんは語ります。

ピュアコスモでは、発達障害児・者の一人ひとりの宇宙(コスモ)のように広がる可能性を引き出すため、周囲が症状を理解し、早い段階から適切なケアと支援に取り組むことを目標に掲げています。だからこそ、支援の先にある自立に向けた制度や就労に向けた訓練機関連の整備を強く望んでいます。

高機能広汎性発達障害児・者とその保護者とのふれあいの機会として、12月11日(日)に神戸市中央区の葺合文化センターで「ピュアコスモまつり」を予定しています。

●問い合わせ

NPO法人ピュアコスモ

FAX 078(291)0369

✉masumi_ym0119@yahoo.co.jp

知的障害の若者に 学びの機会を提供 福祉事業型「専攻科」エコールKOBÉ (神戸市長田区)

現在、特別支援学校高等部を卒業する生徒の多くは就職か施設への通所を選択します。高等部の教育を終えた知的障害のある若者に学びの機会を提供しようと、今春、「学びの作業所」として神戸市長田区に開校したのが「福祉事業型」専攻科「エコールKOBÉ」です。

自立に役立つ

実践的な学習プログラム

現在、エコールKOBÉには15人の生徒が通っています。「主体的に・豊かに・楽しく」をモットーに、学習プログラムには、各自が興味関心の高い分野について学ぶ自主講座や研究ゼミ、自立した生活に向けて金銭感覚を養う講座などを用意。少人数制であることや都市部に立地するメリットを生かし、市内の大学や企業と連携した授業もあります。さらに、専門家のアドバ

イスを受けながら作品づくりに取り組めるパソコンルームも設置しています。

近くにある市立地域人材支援センターの施設を利用し、文化祭等の学校行事や調理実習などもしています。今後は地域のイベントや活動にも参加していく予定です。

2年間で得た自信を

将来につなげるサポートも

エコールKOBÉは2年制で、生徒たちは修了後、企業や地域の通所施設などに進みます。2年間で培った自信を自立した生活の設計にどうつないでいくか、そのあたりのケアはこれからの課題の一つといえます。

学園長の河南勝さんは「学生たちはここで主体的な学びに出会い、将来に手応えを感じているようです。私たちは、専攻科を特別支援学校から社会への移行期における、自

分づくりの場」としてとらえています。彼らの学ぶ力の育成にも専攻科の教育的効果は高く、周囲の期待の大きさも感じています」と話します。

エコールKOBÉのような専攻科は県内はもとより、全国的でも数が少なく、その成果によって今後増えていくと予想されます。特別支援学校の卒業生の進路の選択肢に加わるかどうかは、エコールKOBÉの実績も大きな鍵を握っているといえるでしょう。

◀少人数制なので講師の目が行き届き、一人ひとりに丁寧な指導ができます

●問い合わせ
福祉事業型「専攻科」
エコールKOBÉ
TEL 078(641)9780



▲「エコール」はフランス語で「学校」の意味
◀パソコンの授業ではフェスティバルで使うポスターを制作



▲ほぼ毎月発行される学園報。保護者からも日頃の学習の様子などが分かるかと好評です



内部障害者・難病患者にスムーズな支援を 「譲りあい感謝マーク」ができました

兵庫県は、心臓や呼吸器などに障害のある「内部障害者」など、外見からは配慮が必要なことが分かりにくい人の社会参加を応援する「譲りあい感謝マーク」を作成しました。内部障害者(身体障害者手帳所持者)や難病患者にマーク入りのピンバッジやキーホルダーを有償で配付しています。電車やバスでマークを付けている人を見掛けたら座席を譲るなど、常日頃から配慮を心掛けましょう。

●問い合わせ

兵庫県障害者支援課 TEL 078(362)4379 FAX 078(362)9040
※ピンバッジなどの配付については
財兵庫県身体障害者福祉協会 TEL 078(242)4620 FAX 078(242)4260





障害当事者スタッフが被災地の障害のある人を支援

メインストリーム協会(西宮市)

全国自立生活センター協議会に加盟している「メインストリーム協会」は、重度の障害のある人が自立して生活できるようあらゆる面でサポートしています。東日本大震災後、協会の障害当事者スタッフからは岩手県にボランティアとして出向き、現地の障害のある人の支援にも取り組んでいます。

◀被災地での活動について話し合うスタッフ

同じ目線で悩みを聞き アドバイスを送る

岩手県では震災直後から障害のある人をケアする「被災地障がい者支援センターいわて」が立ち上がり、さまざまな支援活動が始まりました。しかし、障害のある人の多くは外出しづらい状況が続き、どのくらいの人数が被災したのか把握できませんでした。「障害者のボランティアがいればもっと悩みを打ち明けられるのではないかと。同じ目線で話し合える障害者をボランティアで派遣してもらえないだろうか」という要請を受けました」と事務局長の佐藤聡さん。6月からメインストリーム協会の障害当事者スタッフと健常者スタッフが被災地を訪問。9月末までに14人が現地入りしました。

ボランティアたちは避難所や仮設住宅などを回り、被災した障害のある人の悩みを聞いたりしています。協会では今後、全国自立生活センター協議会に加盟する他団体とも連携し、全国から障害のある人を募集して派遣したいと考えています。

佐藤さんは被災地を訪ねるうちにある問題を発見しました。それはヘルパーが必要な状態にもかかわらず、ヘルパーを問わずに不便な生活をしていた人たちが多くいることです。「障害者たちが抱える多くの問題が震災をきっかけに出した感があります」

協会が目指しているのは単に震災前の状態に戻すのではなく、バリアフリーに改善するなど、障害のある人も安心して地域で自立した生活ができる環境づくりと、障害のある人も差別されることなく社会で一緒に生きることができるようまぢづくりです。



▲被災地に出向いた藤原さん(右)と畑さん(中)

実体験を伝えて 被災者の自立支援を

ボランティアを志願した藤原勝也さんは、筋ジストロフィーのため呼吸器を付けて車いすで生活しています。現在は郷里の丹波市を離れ、西宮市で一人暮らしです。「被災地では10代の人とこれから先の人生でどうすることが自立につながるか、自分の経験や自立した生活への思いについて語り合いました。私自身の体験をモデルとして示すことで、他の障害者が自立を目指す上での参考になると実感しました」

脳性まひのため車いすを使っている畑俊彦さんは自分の生活の様子を収めたDVDを携えて、これまでに3回も岩手県を訪ねました。DVDを見た障害のある人たちが「夢物語だと思っていた自立した生活が実際にできることに驚いた」と目を輝かせたことが印象に残っているそうです。「被災した障害者がこれからの生活に自信を持って臨むきっかけになってくれればうれしいですね」と畑さんは話します。

まぢな、ファミリー
～おすすめの一冊～



発達障害に
気づかない大人たち

星野仁彦著(祥伝社)

「発達障害」というと、つい子どもだけのものと思いがちですが、前書きで「実は『大人の発達障害』の人も数多く存在する」と述べているように、現役の医師である著者自身が発達障害者として、これまで経験した苦労や社会生活での克服の過程に触れながら、発達障害との付き合い方や支援のあり方を教えてくれます。

「ピカソなど一流の芸術家たちも発達障害だった」そう、発達障害のある人の中にも特定の分野に秀でた才能を発揮する人も多くいます。そうした個人の能力を引き出すのは、発達障害に対する周囲の正しい理解と能力が発揮できる機会の提供が大切です。

すべての人が持てる能力を存分に発揮し、活躍できる社会を実現するにはどうすればいいのかを考えさせられます。



12月1日は「世界エイズデー」です

特定非営利活動法人 HIVと人権・情報センター関西支部

12月1日が「世界エイズデー」だということをどれだけの方がご存じでしょうか。

昨年その日、大手新聞の紙面では一言も触れられていませんでした。特に若者にエイズへの関心がとても希薄になっていると感じているのは私たちだけでしょうか。

それでいて、日本の現状は「1日に4人の新規感染」があり、「発病してからの受診の増加」、「欧米と比べた日本の検査率の低さ」。これらは何を表しているかという、「この頃、世間があまり言っていないし、エイズは私には関係のない病気

…」→「まさか自分が!」といったことではないでしょうか。

1996(平成8)年にHAART療法(多剤併用療法)が始まってから、医療は格段に進歩したと言われています。今や、この病気で亡くなる人は激減しました。服薬回数は1日に1~2回。確実に飲み続ければ、その人の寿命まで生活できるようになりました。福祉制度も充実し、治療費の負担が少なく済むようになっています。東京の拠点病院に通院されている最高齢は80歳代だそうです。当事者の生活の質(QOL)をどう高めるかが今後の課題だと言われています。

●電話相談から

私たちが実施している毎週金曜の電話相談(兵庫県委託事業)からはさまざまな「今」が見えてきます。多くある「風俗に行ったんだけど…」という相談。日本ではかつて「家ではコンドーム、外では無しで」と言われることがありました。考え方はさまざまですが、感染症について言えば、どこであっても相手が誰であっても性行為にコンドームは不可欠です。

また、エイズデーに当事者から電話がありました。「入院先で医師や看護師、カウンセラーといった周りの人たちに良くしてもらっている。だけど、この日だから他の人とも話そうと思って…」とのこと。当事者のパートナー、家族、友人と支える立場の人からの思いを受け止めさせていただくことも多くなっています。HIVと共に

生きる人の心に寄り添い、支えとなる人の存在が身近にあることの大切さを感じています。

●検査で出会った人々

私たちが検査や相談を始めて8年が経ちますが、来られる人も様変わりしてきました。「結婚するから」、「子どもができたから」と、カップルで来られる人も増えています。定期的に1年に1度受けられる人もいます。60歳代後半のある女性は「今セックスはしないけど、誰にでも関係のあることだと思うから来ました」と言われていました。

●自分のこととするために

私たちは近畿地方のエイズ啓発拠点として、大阪市浪速区の「chot CASTな

んば」でコミュニティーセンターを運営しています。啓発、研修、支援、相談が主な活動です。エイズのことを話すきっかけとなるDVDやコミックといった、誰にでも分かりやすく伝えるためのグッズも用意しています。どこでも気軽にエイズについて話し合しましょう。例えば、この冊子を見て「『きずな』にね、こんなことがあったよ」と声を掛けられる人に話題を振ってみてください。そして何ができるかを考えて一歩踏み出しましょう。

▶電話相談は丁寧に対応します



◀コミュニティーセンターは明るい雰囲気です

特定非営利活動法人

HIVと人権・情報センター関西支部 www.npo-jhc.com

1988(昭和63)年に大阪で設立。HIV/AIDSについて必要な情報を発信し、HIVと共に生きる人々の視点に立った活動と課題の解決に取り組んでいます。感染経路にかかわらず、HIV/AIDSに関わるすべての人を支援し、あらゆる人の人権が守られた「共に生きる社会」を築いていくことを目指しています。

TEL 06(6393)8851 FAX 06(6393)8852

<主な事業>

- AIDS電話相談(兵庫県委託事業)
※金曜19:00~21:00 TEL 078(222)2270
- ケア・サポート(電話相談、カウンセリング、シェルターの運営など)
- 啓発活動(出前講座、講師派遣、研修、キルト・ポスター展など)
- サンサンサイト検査相談室 ※無料・匿名・即日検査



家族の庭 (2010年・英国)



地質学者のトムと医学カウンセラーのジェリーは誰もがうらやむおしどり夫婦。30歳の息子、ジョーは弁護士になって家を出たものの、しばしば両親が手掛ける菜園を手伝いに来ていました。

夫妻の家には悩める友人たちが訪れます。春にはジェリーの同僚、メアリーが来訪。独身の彼女はたばこワインが手放せず、夫妻と自身の落差を嘆きます。夏に訪ねてきた夫妻の古い友人、ケンも独身。彼はメアリーに関心を示しますが、メアリーはそれをはねのけ、一回り年下

のジョーを誘惑しようとし。秋、ジョーが恋人のケイティを連れてきたところ、メアリーと鉢合わせ。メアリーはケイティに嫉妬と敵意を露わにします。妻を亡くしたトムの兄ロニーを引き取ることになった冬。ある日、ロニーが一人しているとメアリーがやって来て…。

穏やかに暮らす夫妻との対比でメアリーやケン、ロニーが抱える孤独感がくっきりと浮かび、彼らが幸福を強く求めている様子が見事に描き出されています。12月10日からシネ・リーブル神戸で公開。

監督:マイク・リー 出演:ジム・ブロードベント、レスリー・マンヴィル ほか 130分
問い合わせ先▶シネ・リーブル神戸 TEL 078(334)2126

情報ぷらざ

のじぎく文芸賞の入賞者が決定

平成23(2011)年度ののじぎく文芸賞には1,514点(一般の部360点、学齢児童生徒の部1,154点)の応募がありました。いずれ劣らぬ力作ぞろいでしたが、下記の通り入賞者が決定しました。

賞名	部門	部	作者名(敬称略)	作品名
最優秀賞	小説	一般	福島あきら	ミョンミさんの祖国
	随想	一般	塚口佳子	ひとことに、そっと心を添えて
	詩	学齢	内藤廉哉	ホテルになったおじいちゃん
	創作童話	一般	森園順子	まあるいこころ
優秀賞	小説	一般	吉太郎	駅向こう
		学齢	宮垣昂平	飛翔
	随想	一般	小野篁	イケズじゃなかった
		学齢	林明日賀	ニコニコ母ちゃん
	詩	一般	禰寝純子	孫へ
		学齢	伊達絢菜	きょうだいげんか
	創作童話	一般	斎藤向日葵	あっちゃんの大冒険
		学齢	丸山結加	雨のちミカタ

※学齢=学齢児童生徒

12月10日～16日は「北朝鮮人権侵害問題啓発週間」です

政府認定拉致被害者17人のうち、兵庫県関係者では有本恵子さん、田中実さんの2人が認定を受けています。

拉致問題は一刻も早く解決しなければならない人権侵害です。この機会に、拉致問題についての関心と認識を深めましょう。



詳しくは政府拉致問題対策本部ホームページへ
<http://www.rachi.go.jp/>

イベントガイド

福崎町人権フェスティバル	<ul style="list-style-type: none"> ●日時/12月3日(土)9:30～12:00 ●場所/福崎町エルデホール ※JR「福崎」駅から徒歩約5分 ●内容/講演「大人も子供も自分を認め合う世の中に～パーソナルポートフォリオを使って自己肯定感を高める実践～」岩堀美雪さん(小学校教員) ミニコンサート、小中学生の主張・体験発表、小中学生のポスター・標語の展示など ●問い合わせ/福崎町教育委員会社会教育課 TEL 0790(22)0560
香美町人権講演会	<ul style="list-style-type: none"> ●日時/12月4日(日)13:30～15:30 ●場所/香住区中央公民館文化ホール ※JR「香住」駅から徒歩約10分 ●講演/「ぬくもりを感じて」中倉茂樹さん (徳島県人権啓発青少年団体連絡協議会「止場の会」事務局) ●問い合わせ/香美町町民課人権推進室 TEL 0796(36)1110
市川町 ヒューマンフェスティバル	<ul style="list-style-type: none"> ●日時/12月11日(日)10:00～12:00 ●場所/市川町文化センター ※JR「甘地」駅から市川町コミュニティバス「市川町文化センター」下車すぐ ●講演/「橋はかかる～被差別部落に生まれ育って～」村崎太郎さん(猿まわし師) ●問い合わせ/市川町教育委員会生涯学習課 TEL 0790(26)1010

ハーフタイム

「きずな」では奇数月に「ふれあいサロン」コーナーを設け、読者の皆さんからいただいた感想や意見を載せています。毎回多くのはがきやメールが寄せられており、特に今年4月に誌面をリニューアルしてからは、長い文章を添えていただくことが多くなりました。ある“常連”の高齢の方は、毎回、はがき2枚に心のコもった文字で特集テーマや生活の中で気付いたこと、編集室への励ましの言葉などをびっし

りと書いてくださいます。他にも、障害のある方は施設で「きずな」を読み、その時の思いをメールで送ってください。

読者の皆さんが時間を見つけて書いてくださるご意見やご感想に対し、お一人、お一人に返信はできませんが、この場をお借りして感謝の気持ちを述べさせていただきますとともに、私からも皆さんに送らせていただきます。「毎回お便りを楽しみにしています」。(田中)